

## 小谷城址の研究 (5)

— その居住性について —

丸山竜平・深貝佳世\*

### A Study of the Ruins of Odani-jo (5): Concerning its Habitation

Ryuhei MARUYAMA and Kayo FUKAGAI

#### はじめに

先に我々は「小谷城址の研究 (4)」<sup>1</sup>において、山城における山岳寺院的様相を探ってきた。その結果得られたことは、山岳寺院に、それが宗教的施設であったり、簡易な修行の場であったとしても、そこに居住性・居住機能が考慮された住居空間が認められる限り、山城が同様な要素を強く持っていれば、そこに居住性が孕まれているのではないかといった分析視角の必要性に到達したことであった。

従前より山城は、平地の居館もしくは城館に対する詰の城として評価され、戦乱時、もしくは下剋上のよりどころとして山上に構築されたものであるとされてきた。このため、その機能もまた戦時での兵士の溜り場として、あるいは被官との間の通信機能を備えた指令塔として評価されてきた。しかし、小谷城においては、1970年（昭和45年）から6ヶ年を要した大広間を中心とする環境整備事業に伴う調査<sup>2</sup>で、多くの陶磁器類を主とする出土遺物が認められた。そののみか、その後の我々の分布調査や測量調査の踏査時においても、大広間に限らず西側の清水谷に面する郭や同じ尾根筋上の中の丸などにおいても多数の陶磁器類を主とする出土遺物が認められた。そこには、従来から我々が知り得た県内における多数の山城とは、様相が随分異なることを知り得たのである。

また、小谷城における清水谷での中心主郭の実体、そこから出土する遺物は不明ではあるが、城主の平地での館を思わせる遺構が想定されているものの、決して他の郭群と比べて特別に際立ったものではない。このようなことからいえば、小谷城の城主浅井氏が平時に居住したのは、清水谷ではなく、当初より尾根筋の山上であった可能性が高い。その中心部分と目される黒金御門を配した大広間跡は、標高340mを測り、平地からの比高差は180mにも及んでいる。このような、居住環境に相応しくない高所が根拠となって、山城の非居住性が一般的定説となっているが、本稿はこのような従前の見解に対して若干の疑義を提起しようとするものである。

山城の時代、つまり中世戦国期がその時代呼称の通り、不断の戦の時代であったとすれば、戦国大名にとって戦時体制を維持しその克服を計るためには、山城が居館性を持つことは至極当然であると考えられる。しかし、だからといって山城一般が居館性を帯びることを意味しない。戦国大名の指令塔としての山城が居住性を帯びれば帯びるほど、それとは相反して一般山城の

\*愛知県史調査協力員

築城はもとより、居住性をも反比例化するものである。おのずと戦国大名の山城、そしてその支城、さらには戦略の中で築かれた山城のそれぞれは、居住性において相異なっただけである。このような視点に立つ時、戦国大名である佐々木六角氏の居城・観音寺城においても、小谷城と同質に検討すべきであろう。そこでは出土遺物の多少や質、器種構成についてはもとより、郭の規模それも平地館城との対比が必要となることはいうまでもない。ここでは特に、小谷城址のもつ石垣遺構に焦点を当てて考察を加えてみたい。

通説では石垣の出現自体本格的なものとして安土城址などがあげられるが、すでに小谷城址などにおいては、その築城当初の大永年間において、強固で規模雄大な石垣による城壁が認められるし、観音寺城においてもその築城年代は不明確であるが、総石垣構えといって過言ではない。石垣による築城想定年代を飛躍的に早めるばかりか、従来鉄砲の導入・威力との関わりでは石垣城塞化の評価が定説であったが、この点についてもおのずと再考が迫られるであろう。なお、この問題は石垣遺構のみだけではなく、中心主郭の建物遺構・主殿、城門、副郭での厨的機能、及び引水施設の評価と不可分なものとして考察する必要がある。このような視点に立って、以下の論述を進めたい。

## 第1章 小谷城址の石垣遺構

小谷城址の石垣遺構は、図1で示したように大広間跡を中心とする主要郭群の随所に見出だし得る。やや子細に述べれば、大広間跡・黒金門前面の石垣遺構(桜の馬場背後)、大広間跡背後の裾部、桜馬場郭斜面、中の丸の前面遺構、京極丸の一部および山王丸の前面の城門石垣遺構などがその著しい例である。

これらの石垣遺構は大きく2種に分け得る。1つは主要郭の前面・城門を挟む石垣遺構である。黒金門と山王丸前面がその代表となる。2つ目は主要郭群の側面山腹斜面に設けられたものである。本丸左右・東西、山尾根山腹、中でも赤尾屋敷などは著しい事例である。

前者は主要郭の荘厳化、権威化の象徴的構築物である。それと同時に、同じく荘厳化を果たした巨大な城門の、強固な基底部の確保も機能的に合せ持つ。他方、後者については中心郭の平坦部の有効的な面積確保を意図し、併せて側面の郭の平坦地有効面積の可能な限りの確保を目論むものである。つまり、山腹斜面の崩壊防止、及び切取斜面の擁護を意図するものであったといえる。

山岳寺院の石垣遺構の例示をもって後述するように、鉄砲伝来に伴う防御上から石垣構築の由来を説くことは、近江の山城を通観する限り不可能である。小谷城において最も多く鉄砲が用いられた、姉川合戦前後における城郭増改築部分や新たな関連山城・出丸・支城では、石垣の構築は認められない。緊迫した戦況での城造りゆえ、石垣構築に至る猶予を欠いたとの見方も成り立ち得るが、生死をかけた戦場での築城においてこそ石垣造りの城壁の認識程度が示されるのであって、例えば信長の築く大津市宇佐山城<sup>3</sup>は、虎口前面下等に城壁を築くことで知られる。このような点からいえば、当初より石垣を多用した山城(観音寺城、小谷城、鎌刃城など)は、真の意味での防御の有効性を、伝来してきた鉄砲においては感得しなかったことを推測させる。このことを考察するためやや詳しく石垣について触れ、その構築年代にも迫ってみたい。

### [大広間石垣]

大広間前面の黒金門を構成する土塁は、その外回り壁面を石垣で構築するが、石段右側の一

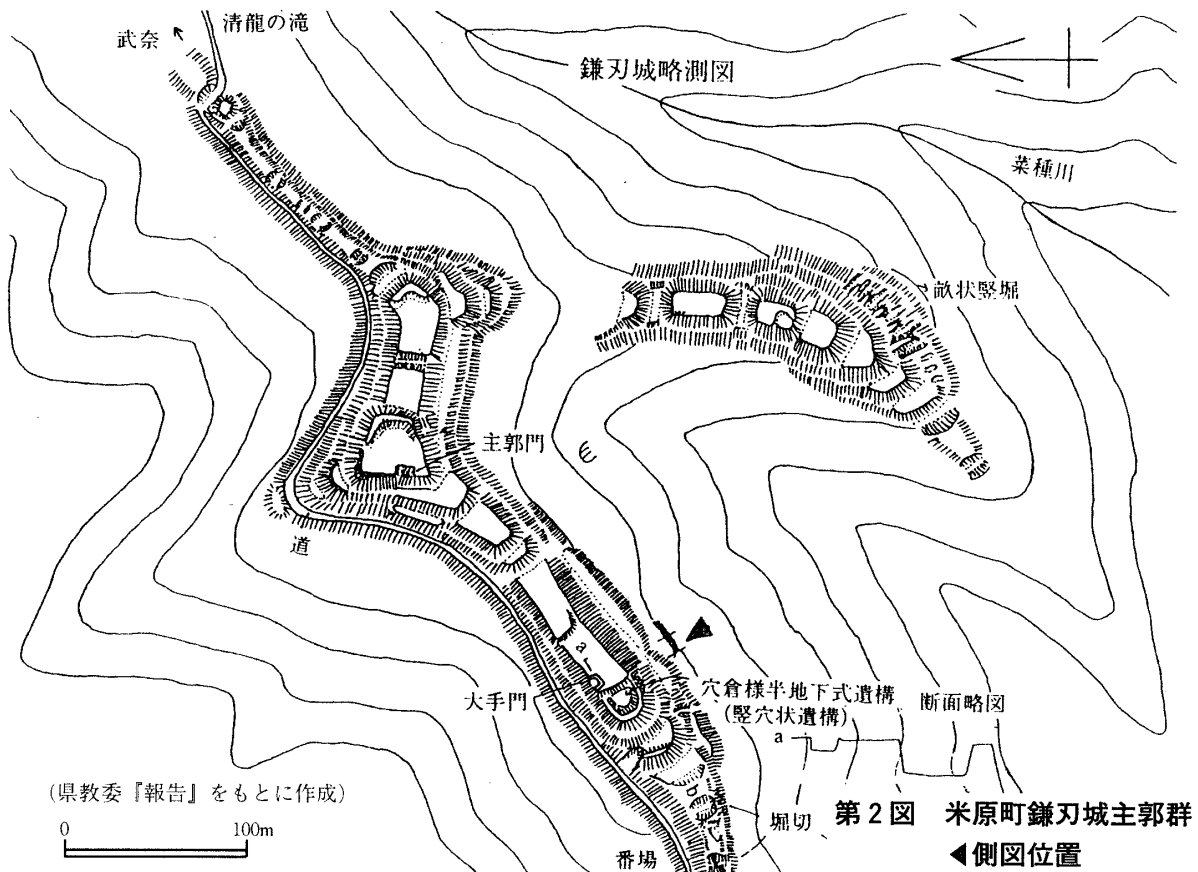
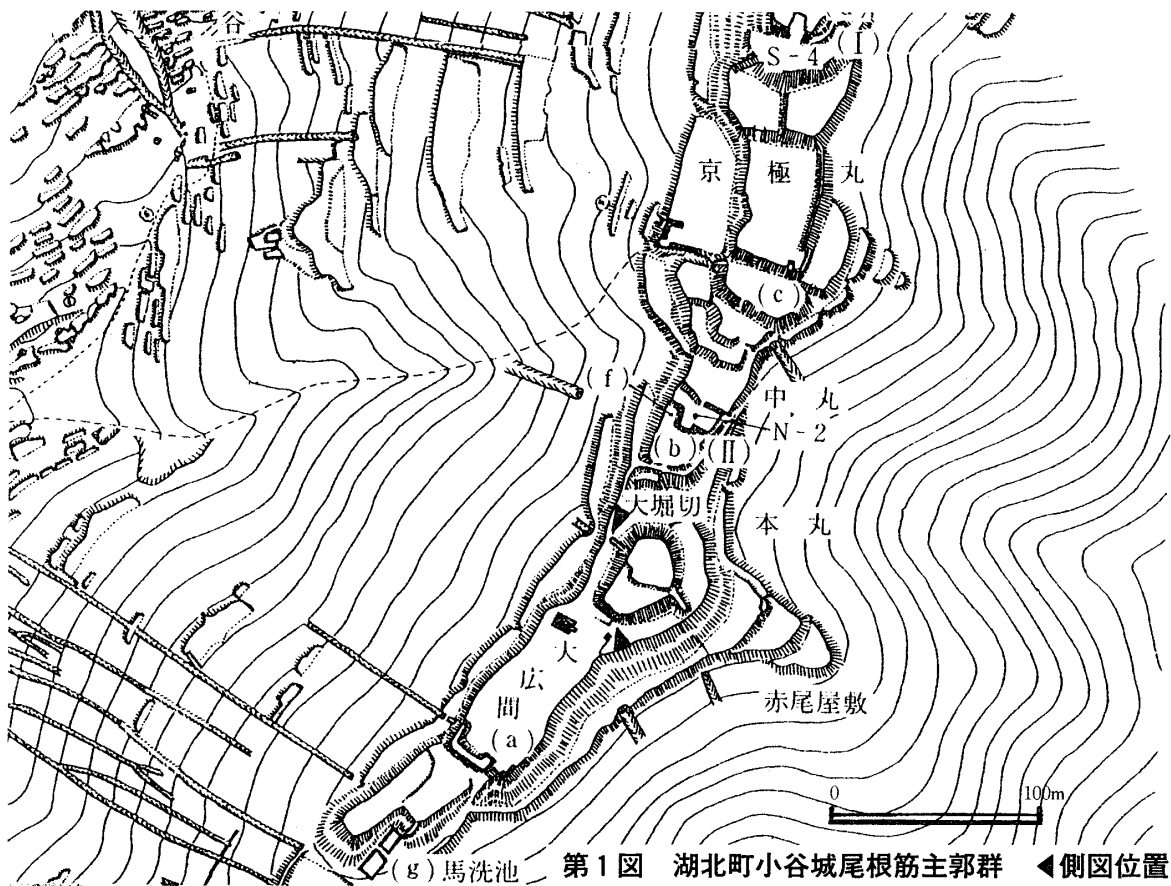
部を除いて大破している。これに比して大広間背後の本丸裾部では、やや石材が小振りではあるが、化粧として施された石垣遺構が完存している（第5図）。その規模はおよそ全幅長15m、高さ2.5mに及んでいる。石積の構築技法を明らかにするために行った石垣実測調査の成果をもとに観察しておきたい。

石材は小谷山で採掘された石灰質および、チャート質からなる直方体に整った用材を多用する。石材は横積みを基本に、高さを一定に整えつつ積み上げており、現況でおおよそ8段前後が推定できる。何段積みであるか、数えるだけでこの石積遺構がかなり高度な技法を駆使したものであることが推測できる。石材の大きさは直視できるもので、横幅が80cm前後、縦高さが30cm前後を最大とし、小振りなものでは横幅40cm前後、高さ30cm前後を測る。横積みされたこれらの石材の上・下段との空間には、15cm前後から拳大の石材が詰め込まれており、この点では、穴太積みの傾向を窺わせるといつてよい。石垣の背後には栗石などを詰め込んだ痕跡はないが、風化の進んだ砂礫が多く認められ、石垣の崩壊を防ぐ排水の機能を持つことがわかる。そして、石材は前面に窺われる以上に奥行きがあって、内側（隠れた部分）へ下降する石材裏面の安定度とともに、より安定感を増しているのである。つまり、石材は後方（傾斜面）に向かって斜め下方に据え置かれて、安定度を加えている。なお、石垣の傾斜角度はおおよそ67度（下方）～74度（上方）で、内湾ぎみに上昇し、天場に向かって角度を増している。石積みの特徴を見るために東端部に目を移して見たい。

最下段の石材は埋没し、明瞭ではないが、その石材横幅60cm前後、縦高さ40cm前後であろうか。横に並ぶ石材から見て基底部にはやや大振りのものが用いられたかに窺われる。これに対して2段目はその横幅45cm、3段目は85cm、4段目は45cm、5段目は80cm、6段目は石材がやや動いているものの45cm、7段目は80cmを測り、その数値から窺われるように石材幅が長短の繰り返しを示す。つまり、偶数の段は石材の木口部分を前面にみせており、隅部石積みがあたかも校倉造の隅部の組合せのように、いわゆる算木積を呈す。後にも述べるが、従来算木積は江戸時代以来のものとする定説がある。上述した石垣は、江戸時代のものほど完成されたものではないが、旧来の説を疑わせるものである。後述する、志賀町歎喜寺の整った、近世の石積遺構と推定させる算木積を（第8図）に掲示した。この歎喜寺の石垣が江戸時代のものとする確証はないが、仮に戦国時代末期まで遡らせたとしても、山城石垣との有効な比較材料となろう。

小谷城における他の観察箇所は、本丸背後の大堀切から西側山腹に築かれた御局屋敷に下る現石段の最上部に認められる石垣である。帯郭・通路部分の平坦地を確保・維持のために積まれた石垣の隅部である。現況で4段から7段前後が認め得る（第6図）。石材規模は大広間背後の石垣よりも遥かに小規模な石材を用いており、大規模なもので幅70cm、高さ20cm前後、小規模なものでは幅25cm、高さ15cm前後である。隅部を観察すると、基底石は全容こそ不明であるが、大振りなものをを用いる。これに対して、2段目は横幅30cm、縦長さ15cmと小規模で、これに対して3段目は横幅70cm、縦高さ20cm、4段目は横幅60cm、縦高さ20cmを測り、3石目と違いがない。また、5段目は欠失しているが、その空隙からおおよそ横幅35cm、縦高さ20cmの石材が想定し得る。さらに大胆に6段目を推定するならば、やはり欠失部分から見て、横幅55cm、縦高さ20cm前後の石材が想定し得る。つまり、大、小、大、大、小、大と大が2度続くものの、明らかに大広間背後の石積みと近似しており、完全な算木積とはいかなくとも、遜色ない構築技術が看取できる。

このようにみてくるならば、これらの高度な石積技法は、決して鉄砲伝来に原因が求め得る



ものでない。このことはすでに、我々の研究「小谷城址の研究 (1)」<sup>4</sup>において、この城郭の築城年代を説いた、1510年代からも推察できよう。なお、この問題についてはさらに県下の石垣遺構を城郭、寺院に及んで比較検討を果たすことによって、より明確化していきたい。以下における石垣の年代検討がその試みである。

## 第2章 山城石垣遺構の年代

鉄砲伝来(天文12・1543年)と深く関わって築造されたとする、石垣出現に関わる定説が横行する中で、正しい見解を導く不可欠な作業は、小谷城石垣の築造年代を推定することである。山城築城に関するこれまでの私見によると、度重なる同一山城の戦場化にもかかわらず、むしろ不思議に思えるほど、全面的増改築のなされた事例に乏しい。戦法や武器の質的变化に伴い、敏感に改修が果たされてしかるべきとの推定に反するのである。小谷城においても例外ではなかったようで、出丸を除いてその感がつよい。しかし、このような見解に反して、鉄砲伝来以降、あるいは姉川合戦前後においては、主要郭の一部が石垣等を築いて山城が変貌を遂げたのではないかとの見解の出ることは必定である。

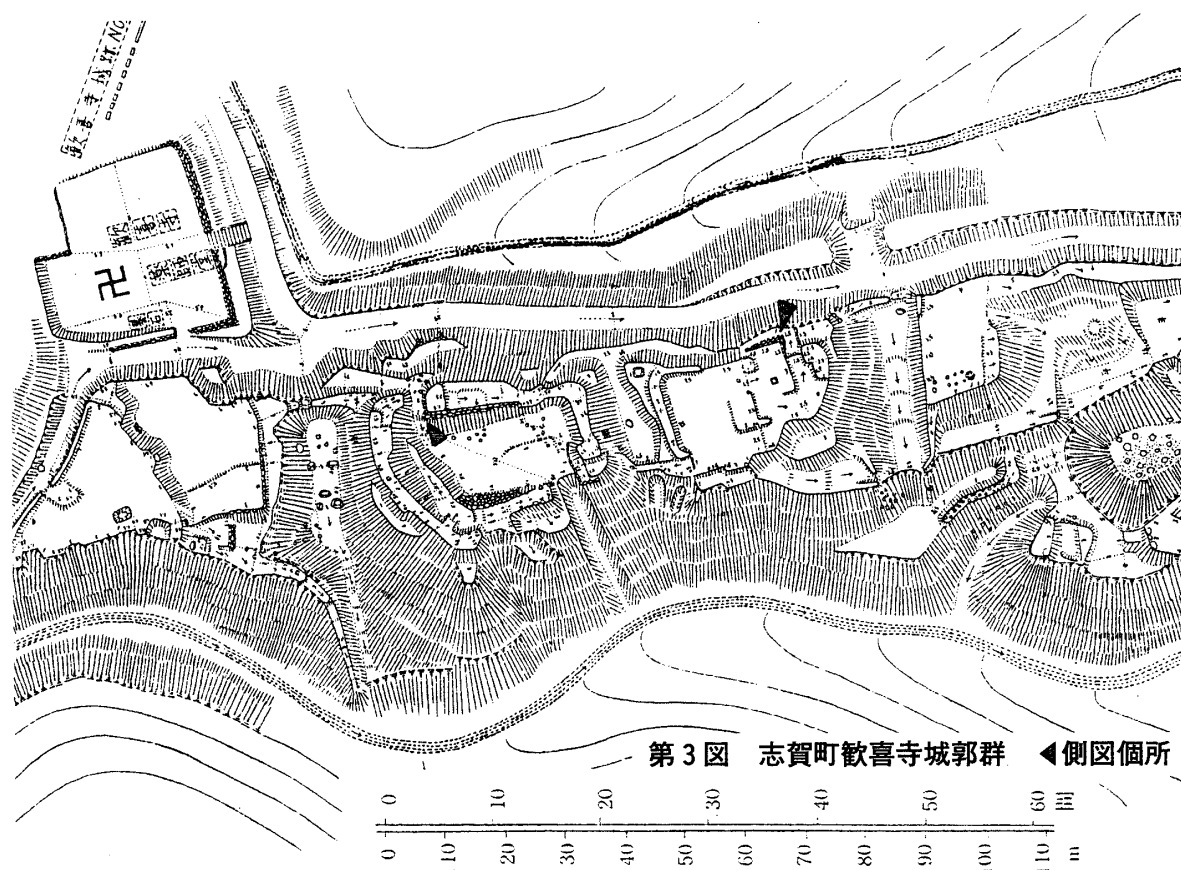
このような通説に対して、たしかに石垣の年代を決定することは、方法論的にも困難を伴うことが多い。これら石垣が中世山岳寺院の石垣遺構との関連で注目されることは多いが、それについても実証的研究を欠いてきたといつて過言ではないからである。ここではまず、近江における石積み遺構の出現時の一点(下限)を次の資料から明らかにしたい(石垣遺構の年代には、さらに遡ると推定し得るものもあるが、戦国期に近いところで構築されたものとしてこの遺構を提示した)。

### 高島町長法寺遺跡

長法寺遺跡は比良山中に所在する山岳寺院であるが、その法灯は早くからすでに失われたらしく、現在はその所在地さえ訪ねるに困難な程である。しかし、寺院跡は大規模で、谷筋の奥には一段高く広い平坦部が設けられ、本堂の基壇跡が観察できる。また、この本堂に取り付く谷筋に沿った参道の左右には石垣に、囲まれた多くの坊跡群が認められた。

当寺跡は多くの例に漏れること無く、信長の焼き討ちによって焼亡を期したとの伝承を持つが、当寺旧蔵と伝える大般若経を初めとする仏像などの寺宝の追跡調査によって、この寺院が信長の近江侵攻(元亀元・1570年)に先立つ160~70年前の14世紀末~15世紀初頭頃に<sup>5</sup>、既に寺運が衰退期にあったことを示した。このことからして、参道に面して築かれた坊跡群の荘厳な石垣遺構がこの衰退期を下限としたものであることは明白である。つまり、近江における山岳寺院の石垣の隆盛は、少なく見積もっても戦国期をはるかにさかのぼる、室町期前半にあったと認めて良い、その有力な例証である。

その石垣積の特徴といえば、写真で(第4図)明示するように、石材は直方体・矩形の打ち掻き整えたものを基本とするが、大小まちまちで偏平なものも随所に使われる。これには石材質の相違も要因となるであろうが、A地点においては、坊舎の石段脇に面する隅部の石積が比較的良好な遺存を示す。その知見によると、それぞれの石材の規模を論外とすれば、長短の石材が交互に配され、極めて不完全な算木積の様相を呈する。参道側に面する隅部では、算木積を呈する場所は、上段部に近い一組・三石のみである。つまり、計算された算木積が観察し得るわけではなく、部分的に認められるといった程度である。このため、他の隅部においては一方から見た場合、まったく算木積の徴候さえ観察し得ない箇所もある。なお、石材にはまれに



「矢」の跡が認められ、このような石材掻取り技法が、通説とは異なって江戸時代をはるかに遡って用いられたことが注意される。なおまた石積は、石段、参道いずれの壁面においても傾斜はなく、垂直である。この寺院境内の石垣には参道の谷筋に面する側で石塁石材が構築されている。参道からの侵入を容易なからしめるものであろう。

以上のように室町時代前半代に属する長法寺の石垣遺構では、意識された算木積などまったく考慮の外であったとみたい。

### 志賀町歓喜寺城跡

志賀町大物所在の歓喜寺城は、山岳寺院の一角に築造された平地の城館をモデルとする寺院付属の城館である。その築城契機は明確ではないが、背後山頂の歓喜寺山城城郭遺構や涼峠遺跡の土塁あるいは野々口山城（法喜寺山城）などから推定し、信長の近江侵攻を契機とする城塞化、築城ではないことは明らかである。湖西ではそれに先行する戦乱もまた幾度か経験したであろうが、先述した他の山城をも考慮してその年代を求めるならば、あるいは、佐々木六角氏に反旗を翻した伊庭・九里両氏による騒乱を契機にしたものではなかったかと推測したい。このような推測が可能とすれば、この歓喜寺城の中心主郭に構築された石垣（第7図）もまたこの頃のものとして推定し得ることになる。その石垣は郭の内側裾部に垂直に積まれたもので、この半地下式穴蔵様郭の平面積をより大きく確保するために、また、削り残して構築された土塁壁面の崩壊防止のために積まれたものである。その虎口部分の様子を郭内から見ると、基底石は横幅55cm、縦高さ50cm以上になり、これに対して2段目は横幅95cmと極めて長く、縦高さは30cmであった。また3段目は横幅40cm、縦高さ20cmと小振りとなり、4段目は3段目と同様小振りである。観察可能な箇所は遺存部分が少なく、明確な算木積は認められないものの、大振りの石材を基底石に据え、長、短と石材を違えて積み上げている様子は、意識的か否かは判然としないが、算木積技法の徴候を窺わせる。

なお、戦国時代終焉後、再度歓喜寺に法灯が戻り、その折の石垣と思しきものが認められる。それは隣接する第2主郭の正面に取り付く石段右側の石積遺構である。江戸期に改築されたとの確証は得られないものの、以下のような調査結果を得た（第8図）。石段はほぼ埋没しきっており、基底石の全容は不明であるが、石段に向かって右手の石積を直視すると、隅部の石積状況は基底石の横幅35cm、高さ不詳、第2段目の石材横幅40cm、高さ25cmを測り、ほぼ同規模であるが、第3段目の石材は横幅長さ50cm、縦高さ20cmとなり、先の石材に比して長いことに気付く。これに対して第4段目の石材は、横幅長さ30cm、縦高さ20cmと再び短く石材の木口を正面に据える。さらに第5段目は、再び横一に据え置かれており、横幅長さ65cm、縦高さ20cmとなる。第6段目は欠失しているが、その空隙からみて横幅長さ20cm、縦高さ25cm前後の木口をみせるものである。

このような様子から見て基底石と2段目石材が同大の木口部分を重ねているものの、その他の部分では横積と木口積とが交互に配され、完璧な算木積を呈する。なおまた石積は、石段に面してはほぼ垂直積であるが、参道に面しては、一段につき数cmから5cm前後ずつ控えるように積まれており、およそ82度の傾斜をもつ。このような整然とした石積構築技法から、この遺構を江戸期のものとするに、大方の意見が一致をみるのもやむをえない。

確かに第1主郭の虎口部分とこの第2主郭の石段脇石垣隅部とを比較すると、その差異は明らかである。この差異をもって17世紀前葉と、16世紀初頭との間の相違とみなすには、なお検討を加える必要があろう。そこで、さらに16世紀前後には築造をみていたと推定される、米原町鎌刃城の石垣遺構を比較検討の材料に加え、考察をしてみたい。



### 米原町鎌刃城

鎌刃城は、中心主郭を始めとして石積遺構が随所に窺われる山城遺跡と評価して過言ではない。そして標高384mから320mの尾根筋上に営まれた典型的な梯郭式の山城である。そのみか、その規模においても戦国期にあっては小谷城や観音寺城に及ばないものの、もし築城年代が推定通り15世紀の後葉あるいは16世紀初頭前後まで遡ることになれば、近江屈指の山城として評価し得る。

さて、遺存度の高い観察可能な尾根筋南の山腹斜面に構築された石垣(第9図)をみておきたい。基底石は埋没しており明確ではないが、第2段目石材は、横幅長さ80cm、縦高さ25cm、第3段目石材は、横幅長さ45cm、縦高さ20cm、第4段目石材は、横幅長さ60cm、縦高さ20cm、第5段目石材は、横幅長さ40cm、縦高さ30cm、第6段目石材は、横幅長さ1m、縦高さ30cmを測り、明らかに横位置に架した石材と木口を見せる石材とが交互に積み上げられている。このことは、ここに算木積の構築技法が存在したことを証するものである。この鎌刃城の構築技法を先に調査した小谷城の石垣積と対比するならば、その傾斜角度が相違する程度で、隅部の構築技法はほぼ近似する。

鎌刃城ではすでに考察<sup>6</sup>したように小谷城の築城に先立つものであって、また、浅井氏がその小谷城築城においてモデルとした山城である。ゆえ、両石垣が構築技法の要所において酷似することは当然である。しかし、おそらく両山城の築城年代は少なくとも十数年から大きく見積もれば、数十年の隔たりが存在するものと推定し得るのであり、しかも、そのような時間差が両石積の技法の中にも看取されるのである。つまり算木積の完成度は、歓喜寺城の第2主郭石段脇の石積技法が物語るように、隅部の石材配置の校倉様にのみあるのではなく、むしろ隅部に続く壁面での2石目、3石目での石材の切れ目が、上、下段の石材の切れ目と四方伐合せ積みもしくは布築き伐合せ積み技法によって連続していくことに重要な意味がある。そのような視点でみれば、鎌刃城のそれは、隅部からみて2石目、3石目の石材が上、下段の石材の切れ目と明確な「ぐいち(王王)」を形成するものではない。そのみか、むしろそのような意識が極めて少ないことを窺わせる。他方、歓喜寺城の中心主郭(第1主郭)の木戸口では、すでにふれたように、算木積の徴候が認められるが、石積自体が低く、そこから多くの情報は得ることはできない。これに対して小谷城においては、隅部から2石目の石材については上、下段の切れ目を塞ぎ、「ぐいち」となって強固な石組をなす形で、積まれており、注目される。しかし、3石目からはこのことがさほど意識されたとは思われない。

以上のことを総括してみるならば、高島町長法寺においては、隅部の石材がまれに木口部分をみせるとしても、算木積が意識されたとは考え難い。これが15世紀前半を下限とする実体ではなかろうか。これに対して16世紀初頭を下限とする米原町鎌刃城においては、明らかに隅部の構築技法に校倉様の構築技法(算木積A段階)が採用されているとみてよい。しかし、算木積を起点として自ずと生じた石材の切れ目を意図的に防ぐ技法が壁面全体に延長され、完成した算木積にいつなるのかが疑問となる。

鎌刃城では、隅部石材から2石目にしてすでに上、下段の石材の繋ぎ目を充分考慮していないことは明瞭であった。そして、この鎌刃城に近似する小谷城においては、明確に算木積の原点となる校倉様の構築技法を隅部を採用するのみか、隅部石材から2石目までは上、下段の繋ぎ目を意識し、一定の効果を上げている。しかし、3石目におよぶと、すでに上、下段の切れ目が縦位置に連続するものとなってしまう、せっかくの算木積がもたらす壁面の強固な石組が充分認識されていなかった。このためいまだなお、算木積B段階に止まるものと評価せざるを



得ない。小谷城と鎌刃城が山城遺構全般における比較によって酷似するものであることが実証し得るが、そのような近似さに止まらず、鎌刃城がまた小谷城に先行するものであることがこの石垣構築技法の発展の差異の中にみてとることができるのである。

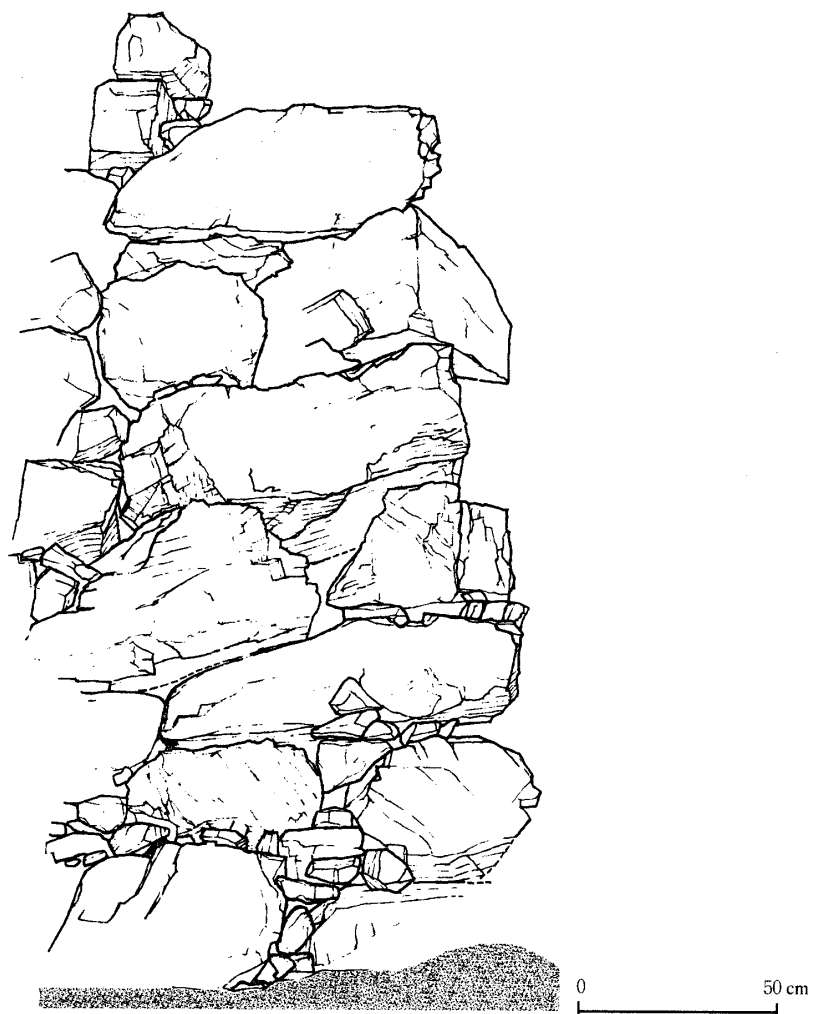
### 第3章 石垣構築の意図

いまだなお多くの論証を残すものとはいえ、石垣積遺構が戦国期、わけても16世紀中葉以前に遡ることはかなり蓋然性の高いものであろう。鉄砲伝来以前に遡る石垣積遺構としては、比良山中の山岳寺院に顕著なばかりでなく、多くの中世山岳寺院に随所で用いられた土木技法であったに違いない。このような山岳寺院の石垣積遺構が山城に採用されたであろうことは、小谷城址や鎌刃城といった山城自体に、不釣合な城門遺構を構えたことを見ても頷けるところである。同じことは小谷城や岡山城のやはり山城に不釣合な土塁遺構からも想定し得る。とすれば、これらの石垣積遺構もまた、山岳寺院から学ばれたであろうことは容易に推察し得る。中世山岳寺院の石垣積遺構の眼目は、やはり山中の険しい地形にあって、安定した修行の場を確保することであり、ひいては寺坊の基盤整備に関わることであったにちがいない。しかしそのみでないことは、長法寺遺跡の石塁やダング坊遺跡の本堂正面の石垣積遺構などに感じられる威厳化・荘厳化が物語るところである。やはりそれらに加えて、寺坊を防御する戦闘的施設としての感も拭い去ることはできない。このような多様な要素を持つとはいえ、寺構えの敷地を土木儀法的に安全に確保する意図が第一義的に働いたに相違ない。

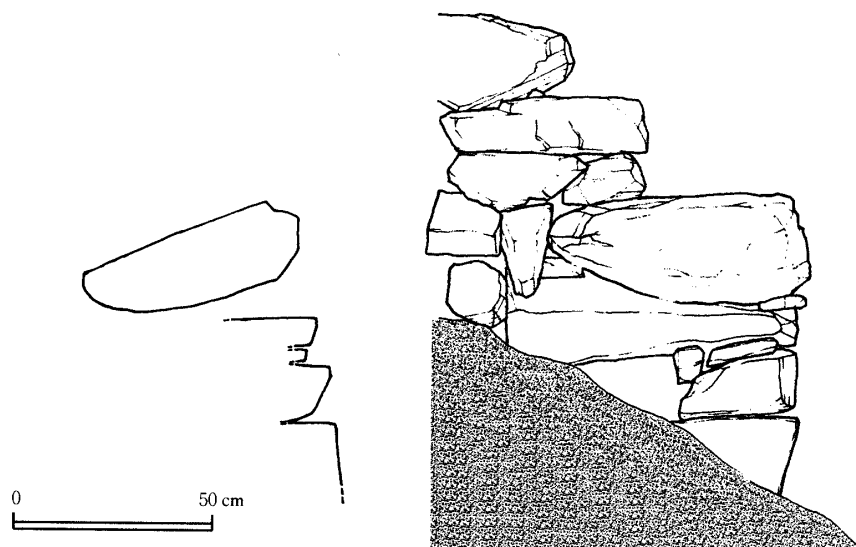
このような推定は、小谷城における大広間の前面・黒金門に取り付く石垣の荘厳化、また、背後の本丸裾部の石垣に見る敷地の確保と土砂崩壊の防壁的機能、あるいは山腹斜面の土砂崩壊を考慮しての防災上石垣といった具合に、山岳寺院のそれと基本的に差異はない。同様なことは鎌刃城についてもいえることであって、中心主郭を取り巻く石垣は、郭の平面積を最大限に確保するものであり、郭に面して削り出し土塁の裾に築く石垣は、やはり化粧的な意味と共に敷地の確保・保全からくる現実的要請である。そのみでなく南側山腹斜面の石垣は、石垣の上端面にいかなる郭も見受けられないことから見て、なんらかの用地の確保に伴うといったものではなく、おそらく崩壊の進む山腹斜面の土砂崩落防止を意図したものである。現在ほどこの南斜面が危険な崩壊地として意識されたと思われないが、それにしても尾根筋郭群から離れた山腹に石垣を駆使した背景には土砂崩落・地滑りが城郭そのものに危険を及ぼすと感得されたからに他ならない。

このような小谷城や鎌刃城に窺える石垣技法の駆使は、これらの山城遺構を、単なる戦時体制下における一時的な守りの拠点ゆえのものとするには不自然である。もちろん城郭築城に際して掘り起こされた岩石が無用の長物として背後においやられ、積み上げられることによって処理されることも充分あり得るし、また、山腹斜面の崩壊が谷筋の汚濁を引き起こし、あるいは河川の流れを変え、農耕に支障を来すといった勸農の処置から崩壊面が石垣される事例もあろう。この両者については、鎌刃城のそれに認め得るものがあるかもしれない。それよりもなによりも、後者の場合においては、戦国期以降の防災上の石垣として研究者により評価されることも有り得るのであって、その年代比定、構築の意図については常に厳密な検討を要することはいうまでもない。

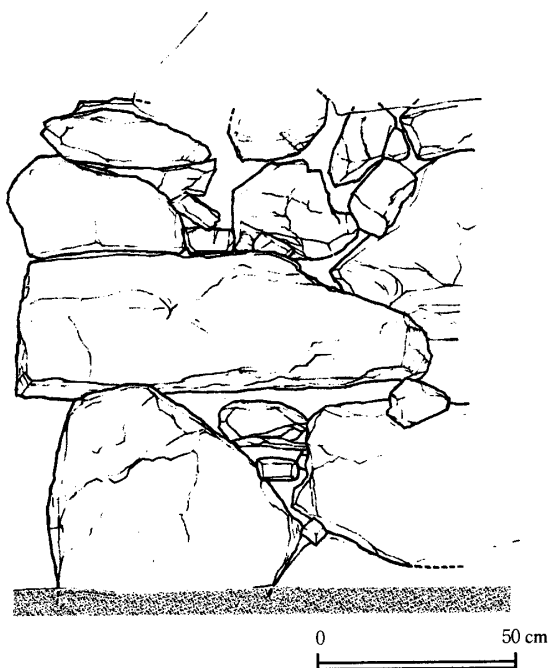
以上のようなお果たさなければならない研究課題があるものの、このような各論的、総論的見通しから、鉄砲伝来に先立って構築された山城石垣積遺構は、それ自体に居住性を暗示する



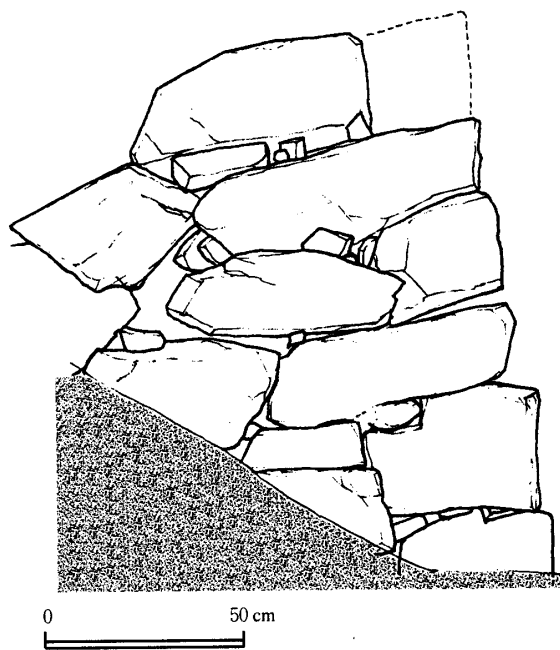
第5図 湖北町小谷城大広間背後石垣



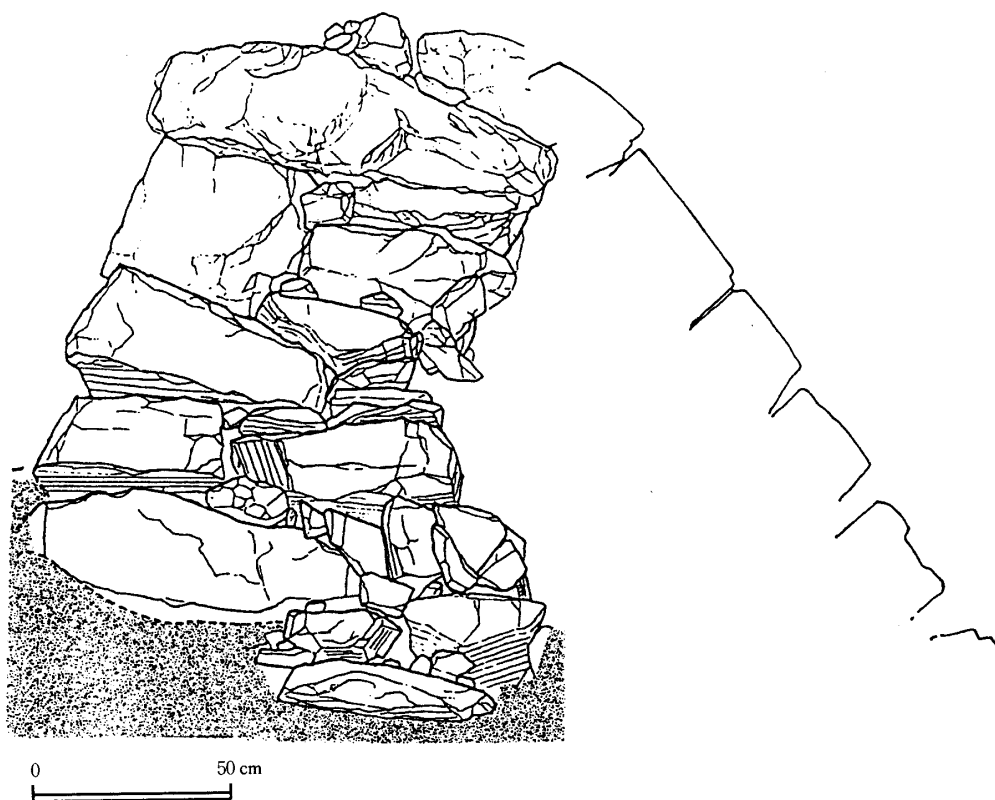
第6図 同 本丸西帯郭石垣



第7図 志賀町歓喜寺城第1主郭石垣



第8図 志賀町歓喜寺城第2主郭石垣



第9図 米原町鎌刃城尾根筋南斜面石垣

ものとみたい。もちろん鉄砲伝来以降のそれについては、別個の視点を加えなければならないことは当然である。

### むすびにかえて

近江での石垣遺構から小谷城の性格を考えてきたが、従来あまり知られていなかったこれら石垣もまた鉄砲導入とは関わりなく、かつ山城の本来の機能から掛け離れた存在に思われる居住性との関係を示唆する。そのみか、それに連鎖しての威信、権威そして荘厳化とあいまって、大規模な城門とともにこの問題の再検討を迫るものとなった。ゆえに、小谷城山城は、浅井氏の平時、戦時における居館的性格を築城の早い時期から合せ持っていたことを予測させることになった。なお、浅井氏の平地における居館の問題についても今後の課題とし研究を進めたい。

### 註

1. 丸山竜平, 深貝佳世「小谷城址の研究 (4)」(『名古屋女子大学紀要 第44号』, 1998年3月) 75~85頁
2. 『史跡小谷城跡環境整備事業報告書』(滋賀県湖北町教育委員会, 1976年3月)  
他に『史跡小谷城跡浅井氏三代の城郭と城下町』(湖北町教育委員会, 小谷城址保勝会, 1988年10月)がある。
3. 『宇佐山城址調査概要』(滋賀県教育委員会, 1971年3月)
4. 丸山竜平, 深貝佳世「小谷城址の研究 (1)」(『名古屋女子大学紀要 第41号』, 1995年3月), 75頁
5. a. 丸山竜平, 深貝佳世「小谷城址の研究 (3)」(『名古屋女子大学紀要 第43号』, 1997年3月), 83頁  
b. 『高島町史』(高島町役場, 1983年11月) 197~202頁  
仮に大般若経の積善寺への移動が寺運とは無縁であったとしても、長法寺史料の最後が文明3年(1471年)11月付けの売券であることからして、このような衰退期に石垣の築造がなされたとは考え難く、下限を引き下げたとしても応仁・文明の乱以後に年代を求めることは不可能といえる。
6. a. 丸山竜平「近江国坂田群天野川流域における境目の城と鎌刃城の歴史的位置 (1) - その考古学的検討 -」(東海学園女子短期大学『紀要』 第31号, 1996年9月)  
b. 『中世山城の郷 2 番場の史跡鎌刃城址』(番場の歴史を知り明日を考える会, 1997年3月)

### 〈参考文献〉

1. 『滋賀県中世城郭分布調査7 伊香郡・東浅井郡の城』(滋賀県教育委員会, 1990年3月)
2. 北垣聰一郎「ものと人間の文化史58 石垣普請」(法政大学出版会, 1987年3月)

〔追記〕現地調査に際しては、多くの地元の皆さんのお世話になった。一人一人ご芳名を記すべきであるが、なかでも湖北町教育委員会山崎清和氏、志賀町教育委員会小熊秀明氏、番場の歴史を知り明日を考える会会長泉 峰一氏、同会会員泉 良之氏、北川麗三氏、田中 薫氏、地元区長さんをはじめとする方々である。宿舎については、米原町番場の堺 千代子さん、志賀町(調査時は大津市坂本)の田邊靖彦さんにご迷惑をおかけした。

なお、小谷城、鎌刃城、歓喜寺城およびダング坊の各石垣実測調査については以下のメンバーで実施した。深貝佳世(筆者・名古屋女子大学O.B.)、青木俊輔(中京大学学生)、岡田 緑、高森真紀、天野利恵、新井裕子、伊藤宏恵、井浪 舞、魚住麻衣、西野靖子、羽賀夕希子(以上名古屋女子大学学生)、引率丸山竜平(筆者)。末筆ながら記して感謝の微意にかえたい。